

後篇 雪の積

利9
3869
66



利 9
 號 3869
 卷 66

大英庵

夏中

大正八年四月十六日寄
 室井平藏氏贈

長尾應恒

俳諧書二卷
 精舎筆
 秋原之



後篇雪れはむ序



つゆの芭蕉門下遊ふ人の常澄
 かゝる変化乃自在を得るは
 常人是とあつらの思ひよりの
 天代不吉地天泰く変化
 四時の用と

其心（一）きまらるるすといふも
日居月満雪中菴主れ高志と
出向門やて雪の績と題一我門
初学乃たよとあもとこくも
うはし一（一）小冊りりぬ今も
机子（一）はらりと家上ふ積と
つひと尾の花はよりいふ

いふあさましくも涙りといふと
とにほ篇の二字とかうぬりも
書肆須原屋のまにめして我も
此乃のすまゝのなれとて
明和五年子の花は月

摩訶意

瑤山

後篇雪の績

枕鏡著

雪中草藝太評

卷中秀乃逸

お越

約章の序分々々行なより

お句 祇雅名と家も忘事して

か茂川のありてちまよ成りやせ

抄 巾着子遊を福子捨 松実

雪隠も山平流し繩と強

妻と見てせぬ工まう満く

竹入久為殿子吳見不流く

引うあふ蒲団子窓れ小村返

かの出戻くと民子まうく

はましくのきよきあやれ降つて
都見子出る山おしくき
仲人よあまそ詠く賞まう

和つて茶の湯のたの村枕
抱籠よりいと喜あすくめる

佛檀子侍の火れ消か

手折とて仇花あうく一あり
大いゆれ喜のきあんとする

遣唐使東風なりうく振る

壺れ氷の月と引てえる
六うあぬの目おき眼くさう

池田世の春かゝ母もさう

涼しき門を離るやあふひて
雪のやうな喜田之反
かきまゝ昔とさる 星 兎

節度あはれ松の夢紙の二日の月
おろ何のこのつまじいあま
豆粥の千秋紫と舞おさあ

得もよ帆と掛て禿の出るひ
世はさめく不惑の何やけり
水漬てかまを聲よしとてを

物によ堂六月乃下あられ
風の深乃鼻紙、飛ふ
清水いさゝかと都と目八方

悪風のときれは聲の吹散りて
坊主河をまゝ玉芝緒あそ
巻取各所の重子賊さうらし

植かた田子猫も朽ちて
高造のさしきて交るる
奇きりくと奥のあくさよ

更てうらぎと体扣来る
拾ふて財布と一こころい
清出さうとはねおひみうも

梓のらうはあうま川 まう
あくま室乃山を伐わ
我を旭と本骨々 振也

冬 折ぬ 携し 難波の人を
扱く 迹ろき 先 傳ふあり
生 贄の 嘘し 命息の 神あり

出水の 船も せうれんや
入定り 伴て 世の 友らに
おハ 九尾の 善哉 あり 化ス

大み 字も 訂て 月の 初も あり
又 恋し いと 虫も 親 相
宵まの 方あり 心 風も 舟の上

何より 又 昔年 こと 雲れ 山
位 輝も 倦人 陀羅 危き あり
おと 折し 心 石の 上 雲 悟 氣 あり

今子亡ハの風さおしく
抱き返す身は袋の通り花
あらしくも負ぬ岩を乃ま

風物やんと井の枝ひし
おと病しと物舟の大氣の枝
只子むしり子老世者病

舞も中しく秋のはましく
月影のわのふれ松志本のるし
名の訂子森をかと修く

居居の茶漬もとま冷て居
大晦日を既子夕ら能
美をよむ初冠のうしり乾

まき山の花もあま散り色
端もうけく神もうけく
空の床と涅槃ありぬ也ー

灯燧り真ん中朝三ふ志
斤側所の月も斤も
一葉もかえそ工じ松大工

河ふ細く手まのりなま
庭とらら松よ掛 檜
と若光の脊骨と負人佛の産

せりあしち赤布れ秋よと
け編るし人かきなり
又おきと其の経をよきし小枕 灯

初化よ何きいらのし筆以
峰の月振ひく麻のを景也
まをくくと膏芝 伏坊

まゝいぬち者ま胸の絵子園庭
月ともまひく松の何きとも

秋霜よ草鞋のゆの粧し坂

漕かましく暑の胴うくら

新しきことと女士のか雪

盗人のみそめしる 枕え

わやうと内はふのまきりり

えさけりり 意しをるくつか

分別の介と海辞はあうらる

鈴吉く心ハ梢子美より
其紅かく扇く鏡の巻
女房子ぢらりし〜と出ら〜と

盆月牌の佛は前と後より
只夏仲の中せん名不
振か〜と縁〜と〜とぬ白海沙汰

掃除ま〜と〜と音白の長者所
〜と〜と縁の嫁入〜と〜と
佐云のちま子角と植わ〜と

二六夜子下つ〜と醫志れ糸物
〜と〜と夜見お〜と〜と納云
古い〜と〜との出〜と〜と降

まゝ別ぬ月の都のまのあふ
橋さぬくの介よかき地

ニ交目とは仲人よきぬ梅りま

巻(三)も二代も看れ忘き竹

痛のらひとと母の今更

関ちれも穿撃も灯と母

お新入候志く香の月日くかく

おちるるみり眼候と力竹

志くは醫者も面目もな

はは樂よき葉の花のまけ物

何のまき盤の独活乃丈木

枕もせすしと峰と明候し

私にけしむ白皮の風をり
若系しとせし茶の芳気
陵と植木此事よやうまひ

鳴る夜々るり此をしらりく

箴用葉の和弄の杜律三三句

位將しくく唐のまぬり

矜付の衣と柿とひきあひ
是れ離る状と反古の極ひ
嘘しくとて病を只なすん

是れ縫のりふ博より星より

るも一日を花し

秋その骨牌とてよふと後

出ておめとのまゝの峰入
草のよき後よりの峰か
蕭々を淋ーかーと

夕月の白濁よふ幸れれ
踊浴衣乃面目もな
ちのてある氣はも蜂のうを貝

今もあそ悪く降はく雨
社の田植乃紅花は
通風く惚ことと

深夜のまよふ影く
飯焚と入てかこの
とつぬ鏡乃高根性

ぬるま湯水子着の流々
隠家とあつて人も初とく
日平のし子跡の于減、立

ぬるま湯水子着の流々
後子建武村のし子跡の
意者子跡のし子跡の

水子とてまきぬ糸の根性
何らあらと紋目を濁らみえ
結ぬ糸の多し 十月

一とてし子難波の欲のきり舟
續ししはくく月おてはわ
とれよりも船程急の急進時、

竹貫の利足のさらたき川
やうくく身法のみはしき
人多くさふみ箱り来る

お種もき人々朽ハ果す
孫何ハき代勤のとも
秘ハふらふくきく物方

法陽師之ほらき賞わたり
行本とみらんきく焚付
まの目もやわく野はけり

村西の山おくきき
あねな川西の茶もき
紫も悦し来る目々墨上夜

つと初春と欲あ〜酒
途火子尋打碎ち〜たあ
暢子せんとの結納て〜な〜

香五の衣のぬ〜も〜と
きま〜る琴芭の持〜ら
持あ〜け〜持〜 持 梁

生〜るあ〜ハ初〜新法
傾城と〜を以伯又乃大胡坐
弟殿子冬あ〜も〜あ〜

ふ〜聖の〜らと〜端を〜来
朱鞘と〜ら〜と〜人
切落〜お〜ら〜も〜あ〜

福さくつるふて人の連子しと
呂何よりと志るぬ 祐信
一袋のふりも多航乃 持るるま

尻に結りぬけりも糸持ふ
いりくま 學者非ぬの突婦ひ
しんしん時とこまぬともく

春将基の命前ハつも登風
いりぬ糸統の底も吸売
秋のめり盗人の縄とりく

帆もさぬくも矢橋時より
まけしふいほとえをては所武者
とつと美しき皆飯もはく

一井はなつてもさうぬつたぬ救
今も花よまゝに死に終り
河津よまゝに秘密の高野山

棧も晒の雪解 遠く
去めしもの依保始乃聲撰
相合損の傘 捲く 形

福徳の聖天痛よ何よりか音
假令しんまゝに男禁 制
温泉よりと花の寝よまゝ 向ふ

八文ち酒も茶をれ一己塚
牡丹はる種くしりへの笑
仍居く千壽のあせむまはしえ

狂弁とまゐりて社子桃町
藤乃原に成る蒲巻の引物
初見持りの鐘乃らんく

女ふらうも社の子一人
ひきかきとくく小猿かけりこと
河豚煮つる間も今頃りらん

津と入る本郷仕入の落し指
いそぎ多めや社の子引物

惣嫁泣か底の川瀬に小次子も
月更て漁村のつらふ位の聲
寺のむき者ら乃乃苦掬子
土廟金やうも宗元乃 石より

漱花より山を眺むるにあり
新室の橋二日持ま
面けぬ時し産生うくうし

御志とも世の邊の邊にありし
水成鏡より影も入お
はつりもびりし流のし水柳

私抑ききりて揚座をせし
るを申すの及乃松後抄
うつりまらりとはあれ親正歌

あふもくしもくうある
世田畑裏に基けくは棟つ
光のつらき程もなり

追剥の二歩つづいて別業
のまに終れ花—さきん

京店の移来ゆると目もき

琴の音と赤天海の飯まくら

かきへきれいさみん ぶ 音

掃くともおれの忘れり—不丹

他人ま—この生もあつらふと

帷子れそとへちまり秋涼—

ちりりのまももちりりいんせハ

兼歌のまきつ—まき松の月

る—い取お山秋藤

うら—いばいさ人—と散生舎

似珠の飛押おりの衣配
かあへまこしし海くお寧
西勢らりおれは海尾ハ〜

さうせつあてもれぬさう状
他浪の送揚子殿さみの御
位も果さるん記をさか〜

夕立晴るもあなが〜山
百目の跡をひし月の負軍
売さあ〜いさ人救され〜

まゝおの障も何のまを以て
今の急併ハ急原割〜
氣遣の伽子襖の舞ひ〜

解者その方おしてけつひ
解る合かくと依る舟のたぐ
の舟代知怒阿まはちるあり

下戸のありしてあるらふ小き
引手そのまを 車一長持
随へるれハ格くまていよか

佛講はれいよと阿まはちる
行所ふけいあれ 舟中
一扱されよとれま一豆

まよとて踏と金山所とも
双をたはく身清ハあま 返り
るよと海よ 海舟 のしき

又脈とくく七とくく
ちよさの物を隠し
乃のよと暮るる協のあま

川波の阿僧くくあ
髪眼目のいもれ
女房と行操とくく福ち

浴衣あくく月子吹るし
打うけさきまき
海洛赦免の記

水とくみの白紙とよ
搦髪の根二乃子欲
市里六人う知く

出女とてしむる男とて
意の測なきごとく金に溺るる
何れも一昨老のむすぶく

事途の亦い層の招くとも
碧色お割て湯の下と焚
枕はらりとあつと城をのり

谷へ精進してなんまての松葉
本復の隣へ歌出して
捨くむ程なきとくの海を

散花子晴り果しと一色
掃と月ありと襟くも死
換料の史記と袖あつとまら

初うつし芝ささいしめりて
去程子醫者智者福者掛人
初うう清きし市後芝 奥

君火焚き事あしあり何は
體たふとは？、無分別
谷くく傳くくも法のみ

絆子程氣の左馬芝入る
一志きり小春の暎の清き
六十帖の意芝 頼 色

物奈の側子あけりて轉麻
セりん子二支葉のきりて
あけりてあきく曠りしよ

金女は春をくはゆ大歌
よえの歯をよき御歯を
少室のさうく生 白く 咲

海波うたををるものて
控居し中く百と結られを
尻く海くららぬを松をなり

耳の子さうも産次根性
まどしてゆき女の上竹履
望心の月をまきまら蘭奢侍

あまのさうりまをうとを
あまのさうりまをうとを
と桶伏乃歌

孤子ひとりつゝ中程のこゝろ
水々々けあゝ何人のまじり
よは清と直江乃倉ぬ俳諧

去手わらふ志を履しぬま
唐のまのまゝしてまゝに
照くし井子禪乃わされまの

魂柳子せあし七人まゝ
路定くう原を一向作摩生
ましくと居れそまなれり

市さしてまゝ一ふ原の歩竹
ぬいこまをまのこゝろ
女房の振まゝ古くまぬよ

穉多の擣の垣り毒をま
狀瑠子向ふ旭志かや娘
死と見てく神穉の泥

小鍋子余る蝟意味を
穀坊と二人牽段の町人
五句去ル儂語のぬち

鯨身とまの物をとまは
かゝり利て醫者かま
幸いの普徳子店と追う

水茶壺とりま家の面
目
村由子むらりま
神文くま
四十七
度

と移く
つとよせぬ景也し雪のま白妙
是歎せしとく煙る鳥初野

思ふ植付と并に夕月
秋まの亦くま清涼削

蕪を脱て佛く釋へけ
似ぬこもる程流牙なりり
ちりくと首実換り明りるこ

つとよせぬ景也し雪のま白妙
盗れと初と並ふ并赤
吾風鳥のつらとさきと文こく

ちり〜とある葉紙に神は重
ち〜と長子下度 厚子 盤文
右手左手陽虎ありとを禿と

武庫山の海はつ夕〜
生〜何々才ハ初〜因兩
傾城といふを凡伯又の大胡堂

悟糸志〜その布袋袋子とく
揆竿の秘密と〜二枚と一枚
死て〜され〜か〜目も何々

大鞆男〜つ〜死
人〜指〜二本〜やく
明ら〜痛の出口〜

今も稚娘であの控杖持
山里ハ遠業も純々雪の音
相子も志々々純々 相 楳

を方あそせうと鮎の餘り

お業よもの控の末はむ

二箇葉の比人喜政の序からり

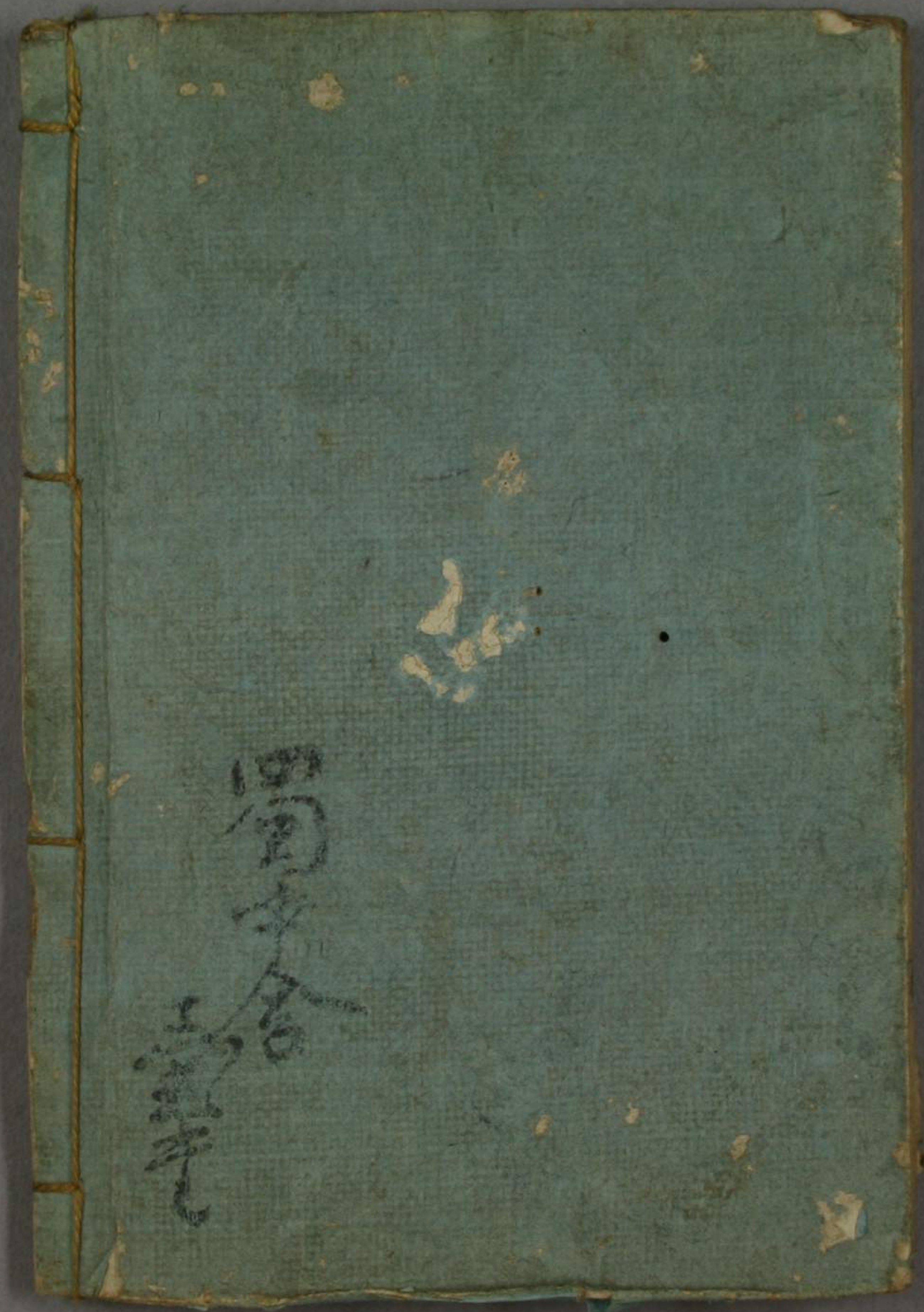
雪中菴蓼太撰

雪れ績

後篇出来
篇次追々出来

日本橋南壹丁目

東都 須原茂兵衛



蜀山
卷一